

たしました。(中略) 願わくば、フェニックス自然動物園が本誌を軸として、これまで動物園のなかった宮崎県になくはならぬ施設として、且つまた、日本の動物園界に新風を吹きこめるような動物園として成長するよう、皆様方のご指導とご鞭撻をお願いしたいと考えます。」

と最後を結んでいます。

つまり、動物園は民間の動物園として誕生したと同時に、宮崎唯一の動物園として公共性も担うことになるのです。

一方、開園当時の園長であり、その後三十年以上に渡り、フェニックス自然動物園を育てられてきました片山望氏は、同じ「あしおと一号」(一九七一年)に、アフリカのサバンナ、広大な大平原に接し、

「この雄大な大自然の懷で生活する動物たちの姿を、日本で、それも宮崎で再現することができれば、動物園人として、どんなにかやり甲斐があるだろう、楽しいだろうと心の底から思ったことでした。(中略) これら社会の要求に答え、できるだけ自然な形で動物を展示しようと大きな試みに挑戦することになりました。と申しますのは、従来、日本の動物園では不可能とされていた飼育法、異なった種類の動物を同じコーナーで飼育展示するという混合飼育法を採用することになったのです。この展示法は、日本でも数園で試みられた方法ですが問題点が多く、成功裡に展示した園は全くありませんでした。そこで、現地調査を実施し、同時にアフリカ園に於いて飼育展示する動物については、できるだけ限り現地調達の上選別購入するという方法をとりました。そして、私(片山園長)は選別の基準を次の諸点におきました。①年令的に若いこと ②健康であること ③食欲旺盛であること ④悪いくせ、例えば咬んだり、けつたりしないこと、などです。」

と記載されているとおりに現地アフリカに出向き、約百頭の動物を

自ら船で運んだとのことです。「あしおと九号」(一九七三年)には、その時積み込んだ動物の種類と頭数を次の表のように示しています。

積みこんだ動物の種類と頭数	
マサイキリン	8頭
グラントシマウマ	22頭
グランツガゼル	8頭
インパラ	6頭
トムソンガゼル	11頭
ヌー	6頭
オリックス	3頭
ゾウガメ	5頭
サイクスモンキー	2頭
カンムリヅル	14羽

表1

動物園の建設は、昭和四十五年の四月に着工され、次のような基本計画で建設は行われたと「あしおと二号」(一九七二年)に記載されています。

① 動物展示域として予定した五万²m²の園内をアジア、アフリカ園に二分し、中央部に巾八m高さ四m、長さ二百mの観覧橋をつけ、橋下に動物舎をつくる。(鳥類については特に収容室をつくらない。)

② 強い動物に追われた弱小動物のために、逃避の場所、安全地帯をつくる。(野生生活を送っている動物たちの中で、強い個体に追われた弱い個体は、通常、ブッシュ(やぶ)の中に逃げこんだり、木のかげにかくれて難を避けます。これに類するものをつくることによって、園内での弱小動物の保全を図らうとの意味です)

③ えさ場や給水場所を数ヶ所に分散してつくる。(飼料を食べはぐれる個体がないようにとの意味です)

④ 松の樹海 園内の自生樹を背景として活用する一方、所要所に植樹を行ない、でき得るならば草などを植え込み、積極的に緑をふやす。

⑤ 野犬による被害防止と展示動物の脱出防止のため、外柵、フェンスの高さを二・五mとし、地下部分にコンクリートの隔壁をつくる。

そして、更に新しい試みとして

(一) 暖房設備は併設しない

(二) 樹木の保護柵はつくらない。保護網は装着しない。(粗飼料を多給すれば、飼育動物の樹幹の喰害は防げるとの考えのもとで実施)・・・等

動物第一陣が到着したのが、着工六ヵ月後の昭和四十五年十月のことだとのことでした。その後、工事も動物たちの馴致も順調に進み、昭和四十六年三月二十八日には、オープンとなるのです。

開園当時のことを、片山園長と共に飼育の責任者として動物園を育てて来られた副園長であった竹下完氏は

これだけの規模の元での混合飼育は日本では初めての試みであり、

なにかジンと重い荷が肩にかかって来る思いがしました。一方それと同時に今までやって来た動物社会の行動研究の成果を知るためのチャンスにもなり楽しみがわいてきました。とのべており、

また、宮崎に初めてできる動物園であり、種類ごとに食事メニューの違う動物たちのために、その飼料の調達に一日中とびまわっていたことなどを、『あしおと三号』(一九七二年)に「自然動物園の生まれるまで」の中で記載しています。

実際に、動物たちは、インパラやグランツガゼルといった弱い動

物から展示場に放され、キリンやシマウマ、ヌー、ダチョウのお見合いを経て、混合飼育と進んでいったとのことでした。

その当時のグラビアが『あしおと一号』(一九七一年)に掲載されていますので紹介します。

(2) 宮崎市フェニックス自然動物園の誕生

フェニックス自然動物園の終わりは突然にやってきました。平成十三年二月十九日、私たちは、社員集会という形で、フェニックス国際観光株式会社(動物園を含む)などのシーガイアグループが、会社更生法の手続き開始の申し立てをしたことを聞かされました。しかし、動物たちにとって幸いだったことは、時を同じくして、宮崎市の動物園の買収計画が持ち上がったことでした。宮崎市は、その年(平成十三年)四月に市民を対象に動物園の存続についてアンケート調査を行いました。調査人数は二千名。回答は八百四十名の方からあり、その中で、約九十パーセントの方が何らか形で残してほしいと答えたとのことでした。その理由としては、動物園は子供の教育の場であり、市民の憩いの場であるという観点だとのことでした。また、約八十五パーセントの方が動物園の存続に市が関与すべきだと回答したということです。そして、市が買い取るべきであると答えた方も半数を超えたとのことでした。こうして、動物園は、宮崎市の動物園として再出発することになりました。

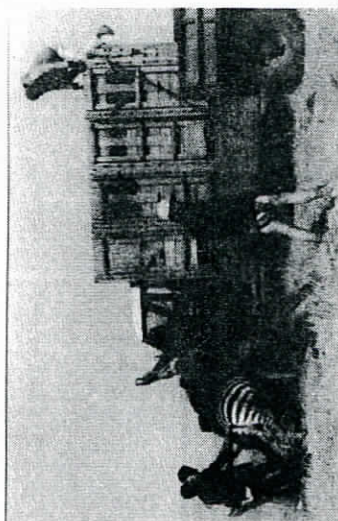
会社の倒産が決まった当時の私たちは、まず、「動物たちはどうなるのか、餌は今まで通りに確保できるのであろうか。」と不安で一杯になったことを覚えています。すぐに、動物たちの処遇は、宮崎市に動物園買収計画があるとの情報が入りましたので目処が立ちましたが、宮崎市に引き継がれるまでの間についての危惧は変わりません。翌日になると、情報が刻々と入ってきました。とりあえずは、営業が変わりなくできるとのことでした。しかし、迷惑をかけた飼料業者さんへのお詫びとお知らせと飼料供給へのお願いの電話

グラビア

生態動物園の誕生

MIYAZAKI PHOENIX ZOO

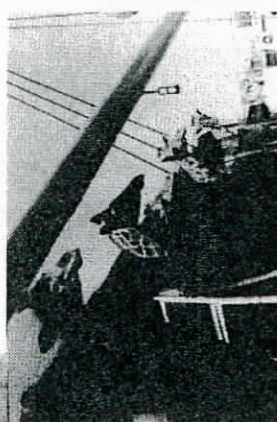
昭和46年3月24日昼と太陽のいっばいある
宮崎に日本ではじめての多種動物の混合飼
育の動物園が生まれました。



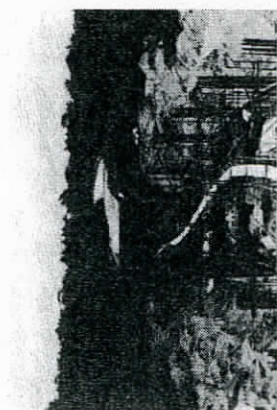
▲ アフリカの画野で捕えられたシマウマ



▲ 動物の餌いづけも園長みずから出かけた。そして各地の
ファームを廻りたくさんの中からお薦めで性質のよい園生
が選ばれた。



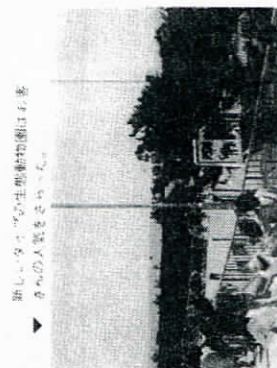
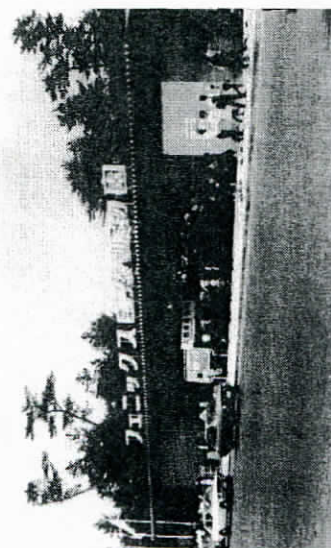
▲ こうして1ヶ月間、いいイーン・ド・洋をのりこえ、長い船旅のあと日本に到着した。



▲ 一方動物園の建設も遅々と工事が進んでいった。



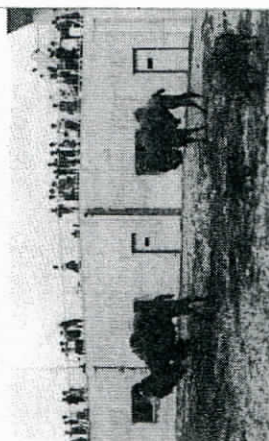
日本ではじめて出来た自然動物園に将田人の夢はたまなかつた。



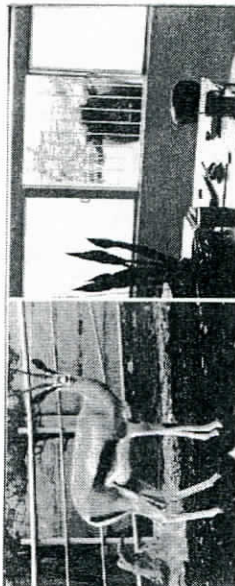
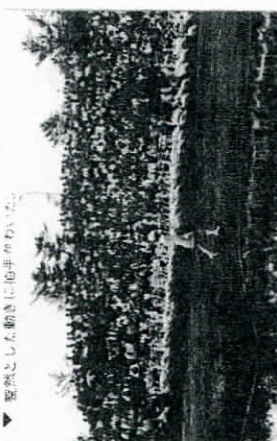
新しい「多々」の生態動物園は、喜
びの気配をさら、え。



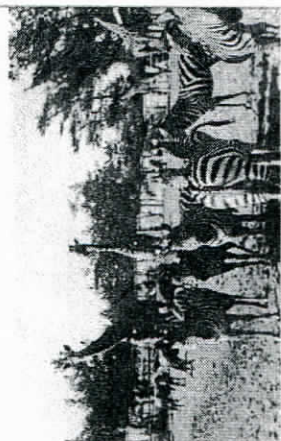
また、この一平は、平でさわれる動物に



その後の発展は、その後の歴史を語る上で重要なポイントである。



この動物園には日本ではじめて来た ▲管理事務所からは園にみられるが、カモシカの群も数多く、中ぞうトラのときには、動物の内ものぞきに驚いた。どち
り方せよは、買品のある玉粒のようだった。だがおりにいるのは、海牛のぞく。



シブウヤ・キリンそしてウーカモノカなどながよく遊んで
いる。まゐりとりと共アツリカである。